



大学院医歯学総合研究科
医歯学教育開発センター教授センター長
田川 まさみ さん
千葉大学大学院卒業
医学博士 平成20年より現職

現在の研究活動【医療者教育学、医歯学教育、内科学】

平成20年から医歯学教育開発センター教授として赴任し、教育プログラムの提案と評価、試験の実施と解析、教育運営等、医学教育全般の業務を行っています。これまでの医学教育は、医学・医療の専門家である医学部の教員に全ての裁量が委ねられてきました。大学教員は自分の専門領域を、自分が教わった経験や先輩教員の指導のもとに、学生や後輩医師を教えることとなります。しかし、医学の発展とともに学生が修得すべき内容は多岐にわたり、患者の皆様にも信頼され社会に貢献する医師のもつべき責任感、対人関係、行動も、プロフェッショナリズムと呼ばれて修得を目指すようになりました。医学部には、大学が目指す医療者育成の理念を実現するための一貫した教育カリキュラムと個性豊かな学生に対応する教育方法が必要とされており、学ぶ学生を支援し、学生や研修医の指導にあたる教員や病院職員をサポートするシステムが必要となってきました。現在は直接学生指導を行うだけでなく、医療者教育の専門家として教育を評価するためのデータを集めて解析し、国内外の情報を収集して鹿児島大学の教育に還元する提案を行い、また教員の教育技能向上を目指した活動を通して、医学教育の改善に取り組んでいます。学生の学習や学習成果の評価に関する研究も行っています。

制約はあっても最先端の仕事を

千葉大学医学部を卒業して臨床研修をしていましたが、病気の原因を解明し新しい治療方法を生み出す研究に興味を持ち、大学病院で肝炎ウイルスの研究を開始しました。医学研究は国際的な競争も激しく社会からのニーズも大きいので、一刻も早く研究成果を挙げなければなりません。素晴らしい恩師にもめぐり会い、深夜、週末を問わず実験する日々となりましたが第一線の研究をする機会に恵まれ、スタンフォード大学の留学も経験して国際学会や論文発表も行いました。帰国後は大学で研究を続けながら大学病院での臨床業務や学生教育も担当しました。ふたりの子供を育てながら、身近にいつでも頼れる身内がいるわけでもなく、さらに一人でたくさんの作業をこなさなければならない日本の大学の研究環境は、非常に厳しいものがありました。

制約はあっても大学教員として最先端の仕事が続けたいと思っていた時に、医学教育というテーマに出会いました。医学生、若い医療者を育てる、そして彼らの望ましいロールモデルとなる指導者を育てることを自分の専門とし、2回目の留学を経て今に至っています。日本ではまだ新しい分野で、鹿児島大学でもこの領域の最初の教授となりました。

後輩へのメッセージ

「女性」であるからできないことがあると考えることはありませんでしたが、やはり育児は嫌でも「女性であることの制約」という現実を突きつけました。育児休業制度の有無に関わらず、休むことが研究者である自分にとってマイナスになることははっきりわかりましたので、なんとかデータを出そうと食いつぶしたこともありましたが、それが必ずしもよいことだとは思いませんが、少なくとも「優れた研究とは厳しいもの」であることは知っておいてほしいです。そして同時に、志す人にとっては「必死になってしまう程魅力的でやり甲斐がある」ということも。

「(私は)自分の好きな場所で、好きなことをマイペースでやっていられればそれでいい。昇進したいとは思わない」と言う人もたまにいますが、それはとても甘い考えだと思います。研究者は世界と競争しながら少しでも良い成果を誰よりも早く出すことができ、初めて評価されるものです。そのような研究者を目指さなければ研究者としての仕事の場も、研究をするための費用も得られません。素晴らしい成果を論文として発信できたときの喜びは、自分のアイデアで研究を行い、時間を費やした結果です。必ずしも長時間の実験をするということではなく、常に最先端に身に置いて、研究のリーダーシップを図ることが何よりも重要です。そしてそのような研究者は男女を問わず世界から認められます。

もちろん、研究者がより研究しやすい環境を整えていくことは重要で緊急の課題です。その支援に鹿児島大学も力を注いでいます。ですから研究者を志す皆さんには、その学問が好きということに加えて「研究者としてあり続ける」という自覚を持って進んでほしいと思います。



**女性研究者の支援と育成に取り組む
国立大学法人鹿児島大学**

鹿児島大学では「一人ひとりが伸びやかに、自分らしく輝くために」という目標を掲げ、男女共同参画の推進に取り組んでいます。

鹿児島大学男女共同参画推進室副室長で、鹿児島大学教育学部教授の田島真理子先生にご自身の経験も交えて、お話を伺いました。

田島 真理子 さん
鹿児島大学男女共同参画推進室
副室長・教育学部教授
お茶の水女子大学
大学院卒業・博士(農学)



**大学を
あげての
取組**



男女共同参画社会の実現は現在、国の最重要課題と位置づけられていますが、現在鹿児島大学(以下: 鹿大)は、女性研究者の割合が高いとはいえません。そのため、この課題解決に向けて、子育てや介護を必要とする教職員が働きやすい環境の整備、女性教員・研究者の増員などの男女共同参画を推進するために、平成21年度に「男女共同参画推進室(現 男女共同参画推進センター)」を設置しました。

平成22年度には「男女共同参画に係る長期(10年)及び短期(3年)行動計画」を策定し、さらに平成23年度文部科学省科学技術人材育成補助事業「女性研究者活動支援事業」に採択され、女性研究者を増やすためのさまざまな取り組みを行っています。

男女共同参画推進センターでは、広報や意識啓発に努め、一人でも多くの女性が研究者としての道を切り開けるよう支援や環境整備を推進しています。現在は15%の鹿大女性研究者比率を本学の目標である20%まで1日も早く達成させたいですね。



**研究支援員
制度**



出産・育児、あるいは親の介護などのいわゆる「ライフイベント期」にある女性研究者の研究活動を支援する制度です。

具体的にはライフイベント期の女性研究者(研究者を配偶者に持つ男性研究者を含む)に対し、その研究を補助する支援員を配置します。例えばデータの分析とか実験そのものを支援員にフォローしてもらうことで、育児や介護の時間を確保するとともに、自身の研究への影響を最小限にすることができます。

支援員は大学院生、又は大学院課程修了者等ですが、研究者のサポートをすることでより見識を広め自身の学びにも生かされます。支援する側・される側、どちらにも良い制度ですね。23年度に始まって毎期約10人ほど利用しています。もっと多くの人に使ってもらえるようにPRしていきたいと思います。

**メンター
制度**



もう一つの大きな柱が「メンター制度」です。これは女性研究者や女子大学院生の相談に、経験豊富な先輩研究者(メンター)が助言をしてくれる制度です。相談する側のメンティーは女性ですが、メンターは男性の場合もあります。

キャリア形成していく上でのノウハウや生活と研究の両立の仕方などメンターから具体的なアドバイスが受けられるのが特徴です。



大学を挙げて
女性研究者支援に
取り組んでるね!



**自身の経験を
振り返って**

国の施策として女性研究者、特に理系の研究者を増やすことが大きな課題になっています。私自身も理系で、大学に入るとき数学と食物学のどちらに進むか迷いました。父が「せっかく(女性が)学ぶのなら、生活に結びつくことをテーマにしたら?」と助言してくれて食物学の世界に入りました。入ってみたらそれはもう、想像以上に奥行きが深く面白い分野です。先生方は「後進の女性研究者を育てねば!」ととても熱心に指導してくださりがたかったですね。

ただ、育児と研究の両立は大変でした。育児休業制度もない時代ですから0歳から学内保育所に預けて研究に復帰。保育所が3歳までだったのでその後、一般の保育所に入れようにもどこもいっぱい入れず結局、お預かり保育をしてくれる幼稚園を頼ってお世話になりました。いろいろな経験が、若い研究者の皆さんの研究環境を良くすることに活かされればと思っています。

研究職は自分が興味のあるものに向き合える仕事です。ステップを踏んで研究対象を突き詰めていけることは本当に楽しいです。興味のある人はぜひ、研究職の道を目指してみてください。